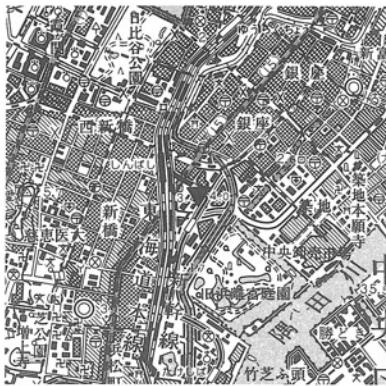


## 東京・汐留遺跡

しおどめ



(東京東北部・東京東南部)

- 1 所在地 東京都港区東新橋二丁目他
- 2 調査期間 一九九六年（平8）四月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 東京都埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 千野裕道・比田井民子・小林博範・福田敏一・小島正裕・小葉一夫・斎藤進・竹花宏之・西澤明・小林裕・西山博章・石崎俊哉
- 5 遺跡の種類 縄文時代遺物包藏地・大名屋敷跡・鉄道施設跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代早期・近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

汐留遺跡は、旧国鉄汐留貨物駅跡地にあたり、汐留再開発地区約三〇・七ha（南北約一・一km東西約〇・二七km）に広がる。東京湾沿岸部の低地に立地し、現地表面の標高値は北（銀座方面）より約四・一～二・五mを示す。

近代になると新橋停車場とその関連施設が建設され、その後構内南西部が東京馬車鉄道会社（一八八一年三月開業）の敷地となつた（一九九一年より東京都埋蔵文化財センターが調査）。調査総面積は約二六・六haである。九二・九三年度調査の出土木簡は本誌一九号で、

遺跡の主体は江戸時代の大名江戸屋敷で、北より播磨国竜野藩坂家（寛文二年（一六六二）信濃国飯田藩より転封、五万三千石）、陸奥国仙台藩伊達家（慶長五年（一六〇〇）所領確定、六二万石）、陸奥国会津藩保科家（寛永（一〇年（一六四三）出羽国山形藩より転封、二三万石）の屋敷地が並ぶ（屋敷名は、以下「脇坂家芝屋敷」のように表記）。

以上の屋敷地は、脇坂・伊達两家芝屋敷に認められた初期造成の遺構と考えられる土留め施設（土留め竹柵・土留め板柵・石垣）から

判断して、江戸湊沿岸域における沖積地の埋め立てあるいは地盤改良などの大規模な造成により形成されたと想定される。各芝屋敷は、大略表に示したような変遷を辿る。各々外郭域の大きな変化として、明暦三年（一六五七）を定点とする脇坂家芝屋敷拡張に伴う海手側の埋め立て、延宝四年（一六七六）を定点とする伊達家芝屋敷の大規模な船入場の埋め立て、延宝五年を定点とする保科家芝屋敷拡張に伴う海手側の埋め立て、宝永四年（一七〇七）新規道路造成による脇坂・伊達两家芝屋敷の縮小及び寛保三年（一七四三）伊達家芝屋敷の再拡張、を挙げることができる。

本遺跡では一九九一年六月より二〇〇一年三月まで調査を行なつた（一九九一年より東京都埋蔵文化財センターが調査）。調査総面積は約

九四・九五年度調査の出土木簡は本誌二号で、それぞれ紹介している。今回は、一九九六年度以降の調査で出土した木簡約七二一点のうち、主要なもの八二点を紹介する。出土遺構は、近世の伊達家芝屋敷に関するもの、保科家芝屋敷に関するもの、近代の新橋停車場構内・東京馬車鉄道会社に関するものに大別される。

近世の木簡は荷札類を中心紹介するが、他に将棋駒・樽・桶・

曲物・籠・膳・などさまざまな木製品に墨書きが認められた。また、

刻書・焼印のあるものも多数出土している。上記以外の文字資料では、木柵（墨書き、未書き、焼印）、上水樋底板・側板（墨書き、焼印）、石垣胴木（刻文）に認められる。

### 一 伊達家芝屋敷

調査地は、伊達家芝屋敷の表向きを主体とする概ね西側半分と東側（海手）汐留川に面する庭園地区にあたる。木簡は、約三〇六点出土した。

出土遺構のうち、五H—六六六遺構・五H—七四三遺構は、屋敷の海手に位置する広大な船入場空間で、木簡はこの空間の埋め立て層から出土した。前者からは、墨書き紀年「寛文六年」のある瀬戸・美濃窯飴香炉も出土している。これらの遺構は、延宝四年が下限と捉えられるが、紀年銘資料を加味すると船入場空間は上屋敷唱替時にはおおよその埋め立て造成が完了していたとみられる。五H—七二六遺構は、問知石組による護岸を有する池跡で、出土した紀年

銘資料・陶磁器の年代観から下屋敷段階の遺構と判断される。

六H—二六〇遺構は、船入場空間六H—七四三遺構の埋め立て後に構築された土坑で、紀年銘資料から延宝四年を遡らない時期、一七世紀後半には廃絶したと判断される。六H—二九一遺構は、海手汐留川に開口する船入場空間で、宝永四年の新道造営に伴い廃絶したと考えられる。

### 二 保科家芝屋敷

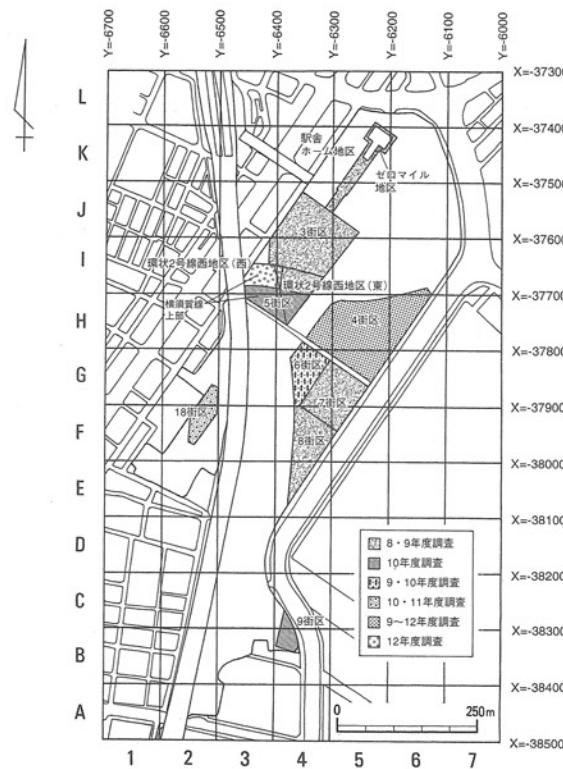
調査地は、屋敷地のうち汐留川に面する範囲である。木簡は、約三八一点出土した。

出土遺構のうち、四F—〇五五遺構・四F—一三五遺構・四F—一四〇遺構・五F—〇九八遺構・五G—三七七遺構は、いずれも中屋敷添地願いによる海手側屋敷拡張域で、土留め施設により区画された埋め立て空間である。五F—〇九八遺構は、海手寄り外郭線に並行する水路状空間であり、木簡はこの埋め立て層から出土した。四F—一四〇遺構は、最も海手寄りの汐留川に面し、拡張後の外郭域を形成する。四G—〇二六一遺構は、これら埋め立て層の最上層に位置する集石である。以上の遺構から出土した遺物は、上限を押領年の寛永一六年、下限を延宝五年と捉えることができる。

四G—〇八八二遺構は、下屋敷空間に位置する土坑で、出土陶磁器は一七世紀前半代から中頃の様相を示す。四G—〇二六九遺構は、埋め立て拡張後の中屋敷空間の溝で、延宝五年以降の遺構である。

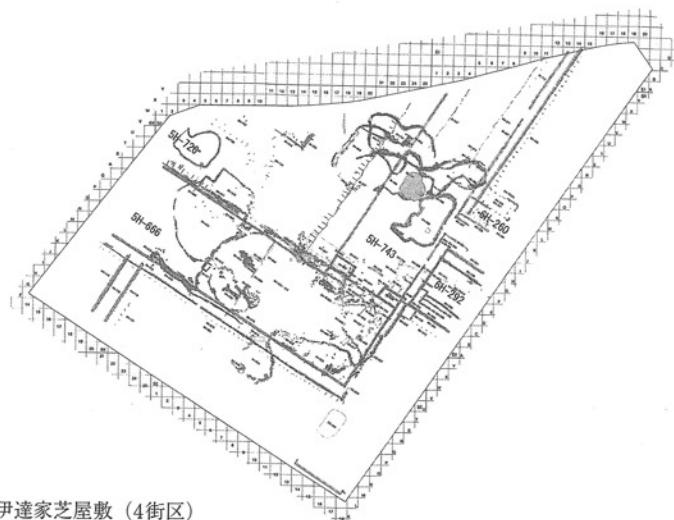
史料に見る各家芝屋敷の変遷と主な災害

	脇坂家	伊達家	保科家
寛永 9 年(1632)以前	下屋敷(拝領)		
寛永16年(1639)			下屋敷(拝領)
寛永18年(1641)	大火被災	下屋敷(拝領)	
明暦 3 年(1657)	上屋敷へ唱替(屋敷拡張)		
明暦 3 年	大火被災	大火被災	大火被災
万治元年(1658)			中屋敷(唱替)
寛文 8 年(1668)	(被災か)	大火被災	大火被災
延宝 4 年(1676)		上屋敷(唱替か)(屋敷拡張)	
延宝 5 年(1677)			屋敷拡張 海手空地を添地
元禄16年(1703)		大 地 震 被 災	
宝永 4 年(1707)	幕府の道路造営による接収のため屋敷縮小		
享保 3 年(1718)	大火被災	大火被災	大火被災
享保 9 年(1724)	大火被災	大火被災	大火被災
享保16年(1731)	(不詳)	大火被災	大火被災
寛保 3 年(1743)		屋敷拡張	
天明 4 年(1784)	大火被災	大火被災	(不詳)
寛政 6 年(1794)	大火被災	大火被災	大火被災
文政 7 年(1824)	大火被災	大火被災	(不詳)
天保 5 年(1834)	大火被災	大火被災	(被害少ない)
明治元年(1868)			「明地」
明治 3 年(1870)	明治新政府による接収		

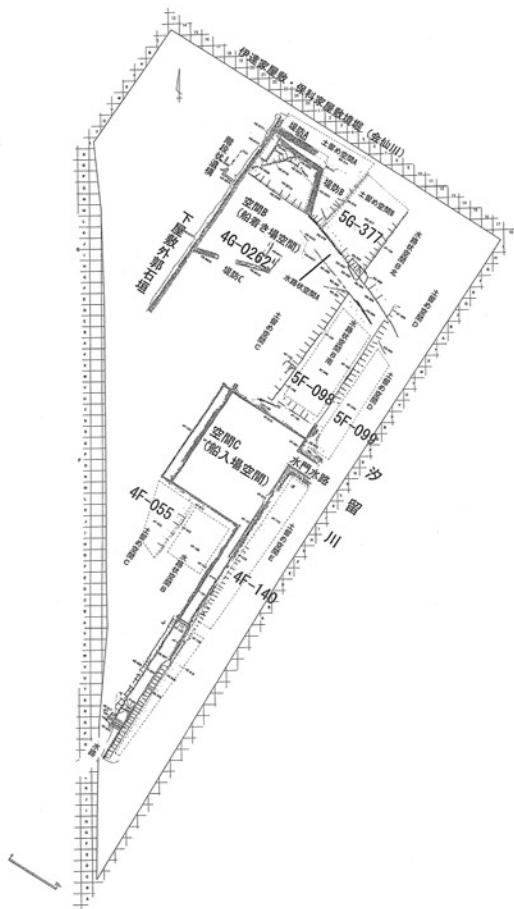


1996～2000年度調査範囲図

### 2007年出土の木簡



伊達家芝屋敷（4街区）



保科家芝屋敷 (7・8街区)

五F—○○二遺構は土留め竹柵で、最も海手寄りの外郭域を形成する空間（五F—○九九）を保持する施設である。年代は、延宝五年を下限とすると考えられる。

### 三 新橋停車場構内・東京馬車鉄道会社

木簡は  
約三四点出土した。

新橋停車場に関する遺構のうち、四G—〇—八二・〇—八五・〇二九三・〇三一一遺構はいずれもゴミ穴で、年代は一九二一年以前の遺構と考えられる。四G—〇—三三六・四F—〇一〇遺構もゴミ穴である。

東京馬車鉄道会社に關わる遺構のうち、二F一〇一九遺構は、煉瓦の外壁をもつ車庫、二F一〇六六遺構は埋樹で、年代は煉瓦組遺構二F一〇三三（車庫二F一〇一九の付帯施設）より新しい。二F一〇七七遺構は、車庫二F一〇一九建設以前の木組溝、覆土より明治以降の陶磁器が出土している。二F一〇九九遺構は、構内を区画する素掘りの溝で、幅は三・八m。断面は逆台形状を呈する。

なお、木簡以外の文字資料として、新橋停車場に関わるものでは  
鑑札（焼印）、病院の薬札（うち一点には「芝区柴井町 跡民病院」と印  
刷）、「東京馬車鉄道株式会社」の焼印があるブラン、「上種水／菱  
形枠「三」／角枠「□□製仕入／下総野田寧／山下平兵衛／「□□  
(篆書体文字)」の焼印が捺された飼葉桶などが出土している。

- |                                     |   |  |  |                                 |
|-------------------------------------|---|--|--|---------------------------------|
| (1)<br>「納三斗七升一勺□□□」<br>108×14×2 011 | (2)<br>「。寛文五年□□□□大院より<br>□□□□□」<br>130×21×3 011 | (3)<br>「寛文四年<br>御米□九本内 □左衛門」<br>130×35×4 051 | (4)<br>「▽拾三斗三升□」<br>「▽五升一勺 長三郎」<br>98×27×6 032 | (5)<br>「▽四月十一日漬」<br>76×15×2 032 |
|                                     |   |  |  |                                 |
|                                     |   |  |  |                                 |
|                                     |   |  |  |                                 |
|                                     |   |  |  |                                 |

(6)	・「 <u>粟野助右衛門様</u> 」		(13)	・「 <u>和済</u> 」	
	・「 <u>濱田新右衛門</u> 」	81×20×2 032		・「 <u>小野寺</u> 」	111×23×4 022
(7)	「 <u>御上やしき</u> 」	150×26×2 032	(14)	・「 <u>和済</u> 」	
	・「 <u>大立国与十郎様 本多文左衛門奉</u> 」			・「 <u>鈴木六兵衛</u> 」	120×22×4 022
(8)	・「 <u>遠カ田</u> 」		(15)	・「 <u>延宝元年分 上伊沢御壳米</u> 」	
	・「 <u>か、み様江</u> 」	108×19×3 032		・「 <u>四斗五升入 金ヶ崎町御米宿</u> 」	146×(20)×3 011
(9)	・「 <u>中塙手籠横河</u> 」			五斗一〇升	
	・「 <u>○ 安藤長右衛門</u> 」	100×18×4 011	(16)	・「 <u>貞享元年 □月廿七日</u> 」	
(10)	・「 <u>○ 石巻中塙手籠</u> 」			・「 <u>□□ぬの□□ 内□□米 □斗□升入</u> 」	165×27×4 051
	・「 <u>○ 安藤勘右衛門</u> 」	111×12×2 011		六斗一六〇遺構	
(11)	・「 <u>○ 塩引横河</u> 」		(17)	・「 <u>△松平陸奥守様中</u> 」	
	・「 <u>○ 安藤長右衛門</u> 」	97×16×3 011		・「 <u>△ 七□之内</u> 」	(148)×30×6 039
(12)	・「 <u>○ 平泉手籠</u> 」			・「 <u>延寶式年分御前金米 四斗五升</u> 」	108×18×6 011
	・「 <u>○ 檜木金七</u> 」			・「 <u>吉田六左衛門</u> 」	140×27×7 051

(19)	・「延宝式年分 御供米 四斗五升」	143×25×7 051
(20)	・「 藤田六左衛門」	143×25×7 051
(21)	・「○上諸白」 ・「○あ□□」	75×17×2 022
(22)	六匁一九一遺構 ・「○下御ひやうふ六双之内」	148×23×4 032
(23)	・「○下御ひやうふ六双之内」 ・「○下御ひやうふ六双之内」	148×23×4 032
(24)	・「○萩塙漬九拾八拾 ○」	195×60×8 011
(25)	「○丑六月廿日 壱□塙百式持」	202×35×10 011
(26)	・「○午ノ十月六日 海老原× □□	147×30×6 019
(27)	・「○松平陸奥守様御屋敷 古内造酒祐方へ御□□□□」	127×25×10 011
(28)	・「○林忠左衛門様 生嶋伯悦」 ・「○津田民部殿 望月縫殿」	222×30×3 032
(29)	・「○松平陸奥守飛脚 江戸江登」 ・「○松平陸奥守様中 成田助之丞荷物▽」 ▽」	316×35×10 031

荷札の記載内容で、特徴的なものを以下に挙げる。宛名における伊達家屋敷の表記は、(7)「御上やしき」(17)「松平陸奥守様中」(27)「松平陸奥守様御屋敷」などである。人名は、送り主である国元の家臣名、受け取り人である江戸詰の家臣名、名主などの農民、商人などである。(10)「石巻」(28)「遠田」(12)「平泉」(9)(11)「横川(河)」(15)「上伊沢」(金ヶ崎町)(26)「西沼村」はいずれも仙台藩領内の地名。品物は、「米」「塩」「粕」「酒」(20)「上諸白」「御茶」「ほつけ」(2)「こ」のわた」などがみられる。特に「米」は、(3)「御米」「御年貢米」(15)「御壳米」(18)「御前金米」(19)「御供米」など複数の表記が認められる。(8)～(11)「中塩手籠」「塩引」(12)「平泉手籠」(13)(14)「和渕」は、7—1に挙げた六H—1九—1遺構以外の各遺構から出土しており、数量的には五H—七四三遺構が最も多いが、各遺構の廃絶時期を考える上で示唆的な遺物である。

(2) 「延宝11年分 清兵衛」

・「新米 五斗入」

103×33×5 011

(3) 「江戸中橋壱丁目 大坂今はし武丁目  
とりかいや中兵衛 同善兵衛」

・「愛宕保命酒」

」 216×52×5 011

(4) 「延寶3年

○尾張町壱丁目  
正月日」

・「捨人之内

○火札  
長兵衛」

104×68×10 021

四F—10|五五遺構

(1) 「▽勝田助之進殿

同断□  
〔候カ〕

木村源右衛門殿  
佐善了雨

・「▽拾斗 石前町」

173×29×2 033

(5) 「▽江戸二面松平土佐守内

佐善了雨  
片岡弥八郎」 238×40×7 032

四四一〇八八一遺構

(6) 「○延五四月廿九日」

木挽方

・「○佐藤次兵衛（焼印）」  
酒井彦右衛門

」

86×40×5 021

四月  
〔〕

86×40×5 021

(10) 「正保四年  
や□□おやなし」

久下田村  
〔〕

(7) 「○井伊伯耆守内  
清水加右衛門」

・「○一箇之内」  
〔〕

207×40×5 011

・「保科肥後守  
いろしろ」

鳥見小や  
〔〕

み□ね

鷹場  
〔〕

81×69×6 021

五五一〇〇一遺構

(11) 「辰十一月十四日  
230×50×5 011

・「○日用□  
杉若丁久兵衛  
〔〕」

〔〕

81×69×6 021

四五一〇一六九遺構

(8) 「○三月廿九日会津ら  
一柳平左衛門殿

井深茂右衛門  
柳瀬三左衛門

」

〔〕

230×50×5 011

・「○日用□  
杉若丁久兵衛  
〔〕」

〔〕

81×69×6 021

四五一〇一六九遺構

(9) 「○柳瀬三左衛門殿  
一柳平左衛門殿

井深茂右衛門  
西郷頼母  
岡崎惣左衛門

〔〕

・「○日用□  
杉若丁久兵衛  
〔〕」

〔〕

91×51×11 021

保科十郎右衛門殿

井深茂右衛門  
西郷頼母  
岡崎惣左衛門

〔〕

・「○日用□  
杉若丁久兵衛  
〔〕」

〔〕

91×51×11 021

日向三郎右衛門

井深茂右衛門  
西郷頼母  
岡崎惣左衛門

〔〕

・「○日用□  
杉若丁久兵衛  
〔〕」

〔〕

17×62×4 011

五F—〇九八遺構

(12) 「延寶四年  
霜月廿日

壳主弥

×

・「當御役所四斗五  
三田之 □□×

(106)×30×8 059

(16) 「。生諸白  
わたや  
長左衛門」

・「  
○石沢兵助殿  
□□太郎右衛門  
橋間治兵衛

小川七郎左衛門」 175×43×6 011

(17) 「(記号) 吉田五兵衛  
林四右衛門」

五G—三七七遺構

(13) 「▽梶原左門△△△」

・「▽梶原左門△△△」

117×30×3 032

(18) 「あゆ三拾入一指」

・「五月十四日漬」

182×32×5 011

・「(記号) 檜さけ式拾五本」

197×41×6

林四右衛門

」

(19) 「。林四右衛門殿

小川七左衛門  
□□×

121×20×2 033

(20) 「。春大豆

五斗

× (189)×41×6 019

(21) 「。生諸白  
三斗入」

・「。藤沢八郎右衛門」

」

189×28×7 011

(15) 「。奥様御所く」

・「。お蔵五尺」

」

140×60×11 011

(21) 「。会所帳箱」

・「。御臺所荷物」

217×27×7 011

(22) 「○出雲荷物仙台三面入」

・「○寛文六年二月朔日 江戸入」

85×15×3 011

四匁一五匁四

(23) 「○角九曜」

保科筑前守 荷物」

・「○庄次郎」

88×25×5 021

四匁一九匁一〇匁

(27) 「○替札

三月十五日

一番

・「粕八拾樽之内 大石弥五兵衛  
十一月十二日 鈴木伊兵衛様」

古田市郎兵衛様」

207×54×5 011

(28) 「○辰三月廿五日  
○替札」

・「○喜右衛門」

85×47×8 021

(24) 「○水嶋伝之助 長谷川七左衛門」  
・「○水嶋伝之助 長谷川七左衛門」

196×27×5 051

荷札の記載内容について、特徴的なものを以下に挙げる。宛名における保科家芝屋敷の表記は、「保科肥後守様」「保科肥後守」「肥後守御屋敷」「保科筑前守様」などがみられる。品物には、(31)

(25) 「御土蔵屋敷」

・「×三分長式寸八分鉄釘善蔵

□」

152×22×2 011

「米」(32)「酒」(43)(47)「生諸白」(44)「鮭」翌「あゆ」「鰯節」などがみられる。なお(3)は同文で形状も同じ木簡がもう一点出土している。

(26) 「▽真綿村□□」  
・「▽真綿村□□」

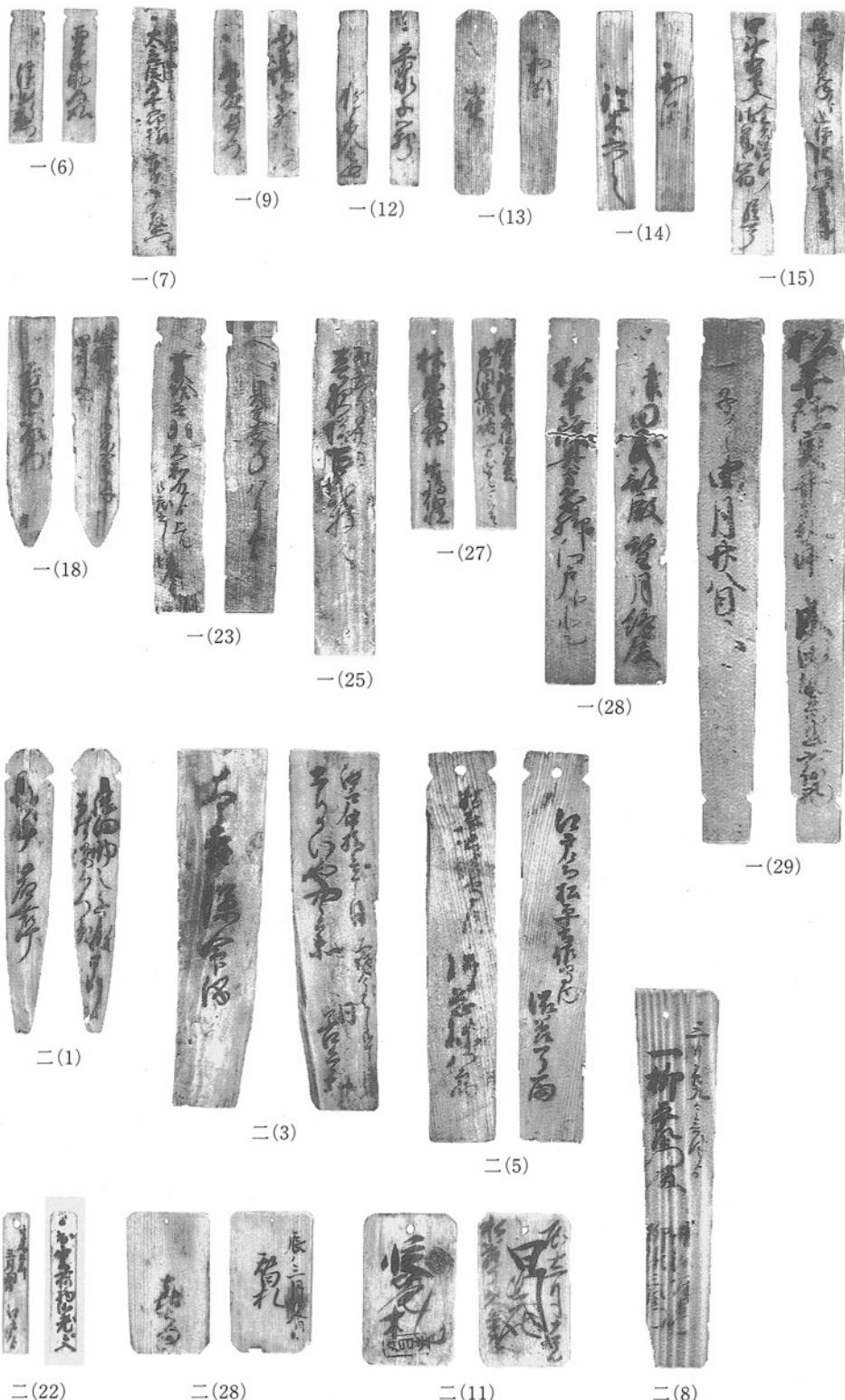
218×27×8 032

その他、伊達家芝屋敷資料同様、送り主である国元の家臣名、受け取り人である江戸詰の家臣名、商人、などの人物に関する表記が多くみられる。(4)(11)(27)(28)は鑑札。

2007年出土の木簡

- (14) 二一〇一九  
・「○第十六号」  
・「○ □□」  
九才八寸  
72×(27)×6 011
- (15) 二一〇九九  
・「竹内昌雄」  
・「□置」  
90×17×3 011
- (16) 二一〇九九  
「佐藤」  
(59)×16×3 019
- (17) 二一〇九九  
「□間様  
卍 □造花講」  
地藏□  
179×67×9 011
- (18) 二一〇九九  
「○□□休馬」  
184×43×8 011
- (19) 二一〇九九  
・「本日カ」  
・「○□□休馬」  
134×(58)×10 011
- (20) 二一〇九九  
・「○休馬報」  
・「□□□」  
180×42×80 011
- (21) 二一〇九九  
「引替之証」  
89×24×5 011
- (22) 二一〇九九  
「廄用」  
198×59×12 011
- (23) 二一〇九九  
「青毛」  
○八才七寸五□  
〔分カ〕  
71×54×10 011
- (24) 二一〇九九  
「赤七赤四」  
○千緑  
58×33×10 011
- (25) 二一〇九九  
「一九七一」  
○高響  
「一九七一」  
○高響  
「五」 (側面)  
59×32×9 011
- (26) 二一〇九九  
「第九号□所課」  
134×(58)×10 011

2007年出土の木簡



(21) 「○花市鹿毛  
」

184×43×8 011

## 木簡研究第一九号

山中 章

100六年出土の木簡

卷頭言—考古資料としての木簡—

(22) 「一「一」一〇  
○花鞍」

(23) 「一「一」一〇  
○花鞍」

58×34×9 011

(24) 「○出勤」  
「○出勤」

48×25×6 011

(25) 「□水  
前」(横材)

72×141×7 011

(6)(7)は荷札。(8)(9)は名札。(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)は馬の登録名札である。  
なお、木簡の収蔵にあたっては、文献資料調査担当(当時)の船橋明宏・宍戸知・田中桂名氏の教示を得た。

### 9 関係文献

東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅲ』(10011年)

同『汐留遺跡Ⅳ』(1006年)

(石崎俊哉)

一九七七年以前出土の木簡(一九)  
平城京跡右京一条二坊一坪 本薬師寺跡  
秋田城跡(第一・八・一二号) 中屋サワ遺跡(第一五号)  
大宝令施行直後の衛門府木簡群  
—藤原京跡左京七条二坊出土木簡の基礎的考察—  
九州特別研究集会の記録  
西海道の古代出土文字資料  
大宰府史跡出土木簡  
鴻臚館跡出土の木簡・年代・トイレ  
元岡・桑原遺跡の概要と出土木簡  
中原遺跡出土木簡とその周辺

頒価 五〇〇〇円 送料六〇〇円  
柴田博子  
大庭康時・松川博一  
酒井芳司  
菅波正人  
田中史生